岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第372集

矢崎（やざき）Ⅰ遺跡第1次発掘調査報告書

―関遊水地内河川工事関連遺跡発掘調査

国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

矢崎（やざき）Ⅰ遺跡第１次発掘調査報告書

一関遊水地内河川工事関連遺跡発掘調査

序

本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地域にあり、10,000カ所にも及ぶ遺跡が確認されています。これらの先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実もまた重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発の調和も今日的課題であり、当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一関遊水地内河川工事に関連して、平成12年度に調査した矢崎Ⅰ遺跡・第1次調査の結果をまとめたものです。調査によって、9世紀前半に作られた平安時代の住居跡や土坑、縄文時代の竪穴状遺構のほか、土器・石器や土製品などが発見され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所・平泉町教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成13年9月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　村　上　勝　治

例　　言

1．本報告書は、西磐井郡平泉町長島字矢崎126－1ほかに所在する矢崎Ⅰ遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2．本調査は、一関遊水地内河川工事に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は建設省（現国土交通省）岩手工事事務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3．岩手県遺跡登録台帳に記載される遺跡番号は、ＮＥ76－0283、調査略号は、ＹＺＩ－00－１である。

4．野外調査期間及び発掘調査面積は次の通りである。

期　　間　　平成12年９月１日～11月10日

調査面積　　2,150㎡

調査担当者　　早坂　悟・安藤由紀夫

5．室内整理は、平成12年11月１日～翌年の３月31日まで実施し、早坂　悟が担当した。

6．本報告書の執筆は、Ⅰは中川重紀、Ⅱ～Ⅵを早坂が担当した。編集は早坂が行った。

7．遺物の分析・鑑定、保存処理は次の機関に依頼した。

（1）石質鑑定　　花崗岩研究会

（2）火山灰分析　　㈱パリノ・サーヴェイ

（3）金属製品の保存処理　　岩手県立博物館

8．野外調査及び報告書作成にあたり、平泉町教育委員会の方々に指導・助言をいただいた。

9．野外調査では平泉町の作業員17名、室内整理では当センターの期限付職員数名のご協力をいただいた。

10．土層の観察は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1989）によった。

11．遺跡内の基準点測量・基準杭の設置は、㈱アクト技術開発に委託した。

12．調査成果の一部を発表した現地説明会資料や調査略報の概略と、本書の記載事項が異なる場合は、全て本報告書が優先する。

13．調査で得られた出土遺物や整理に関わる諸記録等については、岩手県埋蔵文化財センターで保管・管理している。

本　文　目　次

序
例言
Ⅰ　調査に至る経過 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 5
　1．遺跡の位置 …… 5
　2．遺跡周辺の地形・立地 …… 6
　3．基本土層 …… 6
　4．周辺遺跡 …… 7
Ⅲ　野外調査と室内整理の方法 …… 11
　1．野外調査 …… 11
　2．室内整理 …… 11
Ⅳ　検出された遺構と遺構内出土遺物 …… 13
　1．竪穴住居跡 …… 13
　2．竪穴状遺構 …… 17
　3．土坑 …… 18
　4．焼土遺構 …… 20
　5．溝跡 …… 21
Ⅴ　遺構外出土遺物 …… 23
　1．土器類 …… 23
　2．剥片石器 …… 23
　3．陶磁器 …… 23
Ⅵ　まとめ …… 33
　1．遺構 …… 33
　2．遺物 …… 33
付篇　矢崎Ⅰ遺跡のテフラ分析 …… 34

図　版　目　次

図1　岩手県全図 …… 1
図2　遺跡位置図 …… 2
図3　周辺地形図 …… 4
図4　地形分類図 …… 5
図5　基本土層 …… 6
図6　周辺の遺跡 …… 8
図7　遺構配置図 …… 10
図8　実測図凡例 …… 12
図9　第1号竪穴住居跡(1) …… 14
図10　第1号竪穴住居跡(2) …… 15
図11　第2号竪穴住居跡 …… 16
図12　竪穴状遺構 …… 17
図13　土坑(1)（第1号～第4号） …… 19
図14　土坑(2)（第5号）焼土遺構 …… 20
図15　溝跡 …… 22
図16　遺構内出土遺物(1) …… 24
図17　遺構内出土遺物(2) …… 25
図18　遺構内出土遺物(3) …… 26
図19　遺構内出土遺物(4) …… 27
図20　遺構内出土遺物(5) …… 28
図21　遺構内出土遺物(6) …… 29
　　遺構外出土遺物(1) …… 29
図22　遺構外出土遺物(2) …… 30

写　真　図　版　目　次

写真図版1　空中写真 …… 39
写真図版2　基本土層 …… 40
写真図版3　第1号竪穴住居跡 …… 41
写真図版4　竪穴状遺構 …… 42
写真図版5　土坑(1) …… 43
写真図版6　土坑(2)・焼土遺構 …… 44
写真図版7　溝跡 …… 45
写真図版8　遺構内出土遺物(1) …… 46
写真図版9　遺構内出土遺物(2) …… 47
写真図版10　遺構内出土遺物(3) …… 48
写真図版11　遺構内出土遺物(4) …… 49
写真図版12　遺構内出土遺物(5) …… 50
写真図版13　遺構外出土遺物 …… 51

表　目　次

表1　周辺遺跡一覧表 …… 9
表2　土器観察表1 …… 31
表3　土器観察表2 …… 31
表4　鉄・土製品観察表 …… 32
表5　石器観察表 …… 32
表6　陶磁器観察表 …… 32

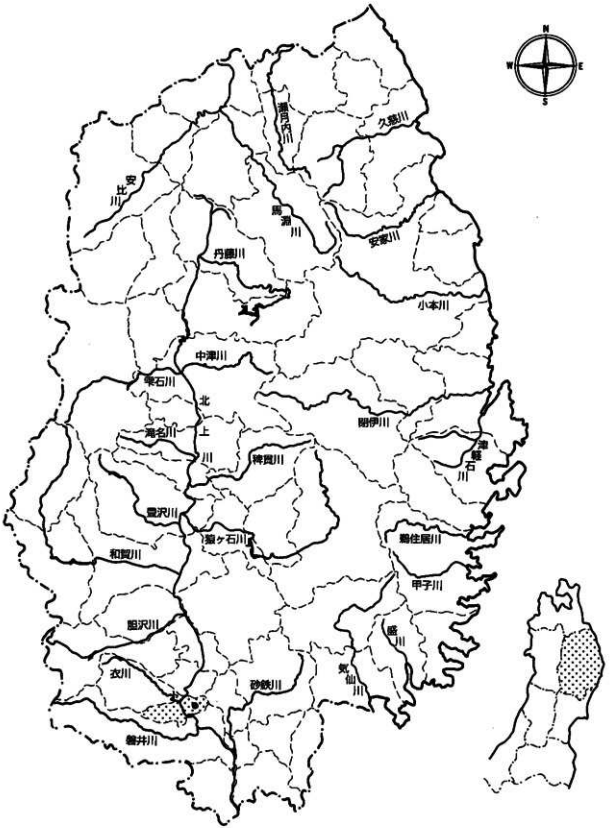

N
W
E
S
久慈川
潮見内川
安比川
馬淵川
安家川
丹藤川
小本川
中津川
東石川
北上川
滝名川
閉伊川
津軽石川
猪岡川
豊沢川
狼ヶ石川
鵜住居川
和賀川
甲子川
胆沢川
盛川
気仙川
衣川
砂鉄川
磐井川

図1　岩手県全図

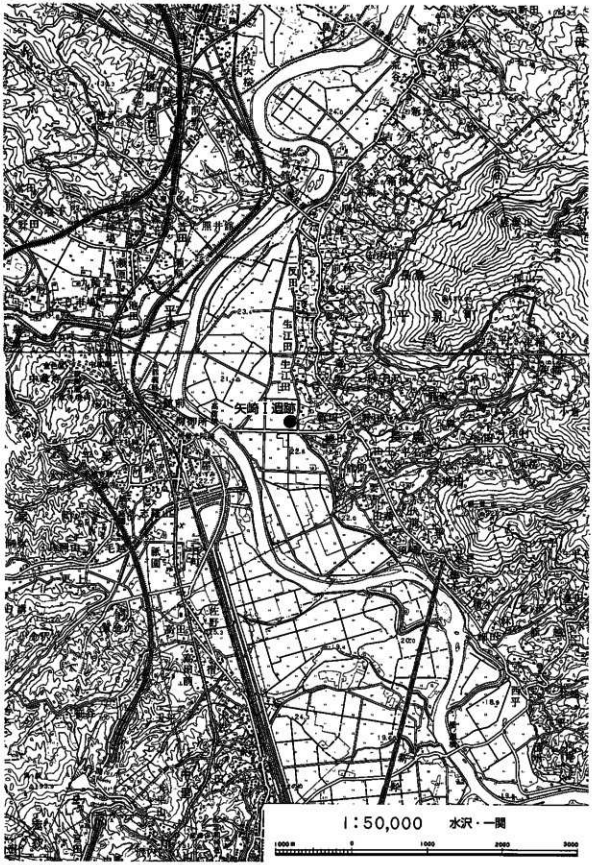


図2　遺跡位置図

Ⅰ．調査に至る経過

矢崎Ⅰ遺跡は「一関遊水地事業、第２遊水地地内河川工事」の施行に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

一関遊水地事業は、北上川上流改修の一大プロジェクトとして、岩手県一関市・平泉町地区を洪水から守るため、二線堤方式による遊水地を建設するもので、上流ダム群とともに北上川治水計画の根幹をなすものである。遊水地は延長25kmの周囲堤と延長18kmの小堤に囲まれた第１遊水地から第３遊水地まであわせて1,450haからなり、洪水調整・市街地等の水害防御および土地の高度利用を目的とするものである。事業は、昭和48年３月に工事実施基本計画が決定されたのを受けて本格的な着工のはこびとなった。

矢崎Ⅰ遺跡については、岩手県遺跡基本図により第２遊水地地内河川予定地に遺跡存在の可能性があったため、国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所の依頼を受け、岩手県教育委員会が平成11年度に試掘調査を実施している。試掘調査の結果矢崎Ⅰ遺跡が確認されたため、岩手県教育委員会が国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成12年８月１日付けで岩手工事事務所所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約し、９月１日から矢崎Ⅰ遺跡の発掘調査に着手した。

図3　周辺地形図

Ⅱ．遺跡の立地と環境

1．遺跡の位置

本遺跡の所在する平泉町は、県都盛岡市より南に約83kmの距離を置き、岩手県内陸の南部に位置している。北は前沢町と衣川村、東は東山町、南は一関市に接する。町のほぼ中央を東日本旅客鉄道東北本線、国道4号線が縦断している。本遺跡は北上川の東側、東日本旅客鉄道平泉駅の東北東約2kmに位置し、その地点は北緯38度59分30秒、東経141度8分17秒付近である。

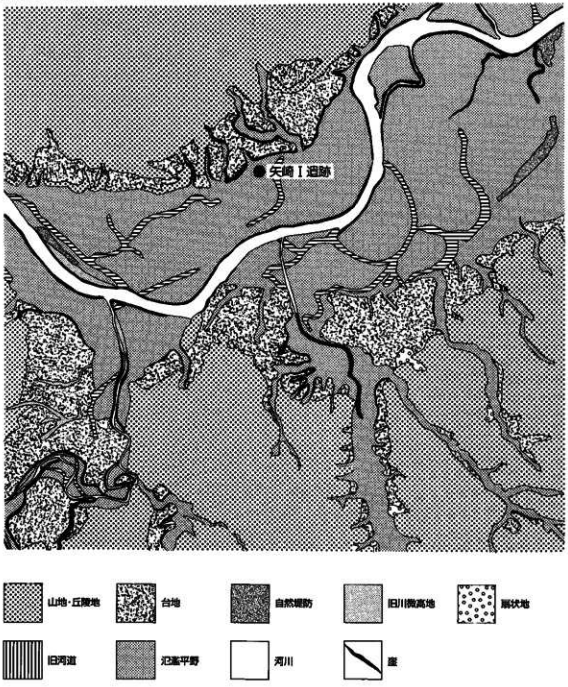


図4　地形分類図

2．遺跡周辺の地形・立地

平泉町周辺は西側に奥羽山脈、東側に北上山系の山々が連なり、町の中央部を県内最大河川である北上川が南流している。また、西部奥羽山脈に源を発した衣川、太田川が東流して北上川と合流している。北上川は一関市狐禅寺付近で山間に入り、狭窄部を形成している。この地点で川幅が狭まることから、その上流にあたる付近では、洪水によって形成された氾濫平野をはじめ、旧河道・自然堤防などが分布している。

また、氾濫平野の西側は東稲西舞丘陵が広がる。この丘陵は大部分が侵食性の緩斜面であり舌状台地を形成している。本遺跡は北側が氾濫平野と丘陵地の境界付近に、南側が旧河道に立地している。遺跡の標高は北側が23ｍ前後、南側は22ｍ前後である。調査前の現況は畑地及び水田である。

3．基本土層

本遺跡は北上川東岸の沖積地に立地する。そのため、幾度かの氾濫によって形成されたと思われるシルト質の層が、粘土層の上に厚く堆積している。基本的には以下のような層序が確認された。

第Ⅰ層　黒褐色土（10ＹＲ3/2）シルト

耕作土及び表土。草根を多く含む。層厚20㎝～40㎝。

第Ⅱ層　褐色土（10ＹＲ4/6）シルト

炭化材をわずかに含む沖積層。平安時代の遺構検出面。層厚10㎝～70㎝。

第Ⅲ層　にぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）粘土質シルト

10ＹＲ2/3黒褐色土ブロックをわずかに含む。炭化材をわずかに含む。縄文時代の遺構の検出面。

層厚20㎝～40㎝。

第Ⅳ層　黒褐色土（10ＹＲ2/3）粘土質シルト

黄褐色土ブロックをわずかに含む。固く締まる。層厚10㎝～30㎝。

第Ⅴ層　黄褐色土（10ＹＲ5/8）粘土質シルト

地山層。黒褐色土粒をわずかに含む。層厚不明。

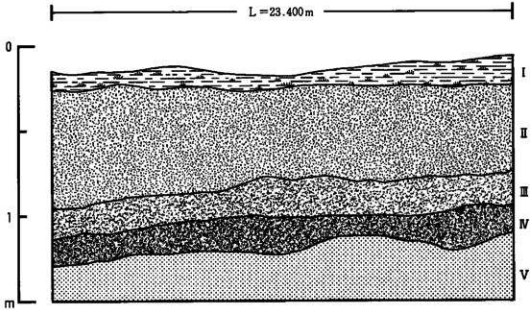


図5　基本土層

4．周辺遺跡

『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』によると、平泉町内で確認された遺跡は現在103ヶ所となっている。時代ごとのそれぞれの遺跡数は、縄文時代16、縄文時代と平安時代の複合遺跡４、奈良・平安時代34、縄文時代と中(近)世の複合遺跡４、平安時代と中(近)世の複合遺跡が４、中(近)世の遺跡が23、縄文～中(近)世の複合遺跡が２、その他時代を特定できないものが16となっている。ここでは、本遺跡と関連があると思われる縄文時代と平安時代の遺跡とその特徴を挙げておく。

なお、平安時代の中でも12世紀、奥州藤原氏に関連する遺構・遺物は本遺跡では検出・出土しなかった。そこで、本稿では北上川西岸に位置する奥州藤原氏に関わる遺跡についてはその内容に触れず遺跡名を一覧表に掲載するに留めたい。

<新山権現社遺跡>平成３年度に岩手県埋蔵文化財センター（以下埋文センター）が調査を実施した平泉町内の縄文時代の代表的な遺跡である。北上川の東岸、東稲西麓丘陵に立地する。縄文時代の後～晩期の土器の「捨て場」であり、竪穴住居跡３棟（後期）、墓坑１基（晩期）、配石遺構３基（晩期）、土坑69基（後・晩期）が検出されている。

<泉屋遺跡>平成元年度～12年度にかけて平泉町教育委員会及び埋文センターが調査を実施した。平泉町内市街地の南東部に位置する。第７次及び第16次調査において縄文後期から晩期初頭の土器が出土している。また、第21次調査をはじめ、その後の調査においても縄文時代のものと思われる土坑の他、前期及び後期～晩期初頭の土器が出土している。

<柳之御所>昭和63年度から平成５年度にかけて埋文センターが調査を実施した。矢崎Ⅰ遺跡の対岸に位置する。９世紀前半に比定される遺物を伴った竪穴住居跡が検出されている。

<志羅山遺跡>平泉町市街地の南東部に位置する。平成４・５年度に埋文センターが実施した第14・25次調査において平安時代の竪穴住居跡が、同様に、平成７年度及び９年度に実施された第46次及び第66次調査において９世紀後半に比定される竪穴住居跡が１棟検出されている。

<瀬原Ⅰ遺跡第２・３次>平成６・７年度に埋文センターが調査を実施した。北上川右岸、平泉町の最北端に位置する。９世紀後半から10世紀にかけて存在したと思われる竪穴住居跡が３棟検出されている。

<里遺跡>平成12年度に埋文センターが調査を実施した。北上川東岸の沖積地微高地上に立地している。縄文・弥生時代の土坑、10世紀前後に比定される竪穴住居跡の他、国産陶器、かわらけ、中国産陶磁器、和鏡など12世紀の遺物が出土している。

引用・参考文献

岩手県企画開発室	1978	「北上山系開発地域　土地分類基本調査（一関）」	岩手県	
国生　尚ほか	1985	「高玉遺跡発掘調査報告書」	岩文振報告書第93集	(財)岩文振
神　敏明ほか	1993	「泉屋遺跡第７次発掘調査報告書」	岩文振報告書第184集	(財)岩文振
金子昭彦ほか	1993	「新山権現社遺跡発掘調査報告書」	岩文振報告書第188集	(財)岩文振
佐々木　務ほか	1995	「志羅山遺跡第14・25次発掘調査報告書」	岩文振報告書第216集	(財)岩文振
瀧　浩二郎ほか	1997	「瀬原Ⅰ遺跡第２・３次発掘調査報告書」	岩文振報告書第257集	(財)岩文振
羽柴直人ほか	1997	「泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書」	岩文振報告書第247集	(財)岩文振
羽柴直人ほか	2000	「志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書」	岩文振報告書第312集	(財)岩文振
(財)岩文振	2001	「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成12年度）」	岩文振報告書第370集	

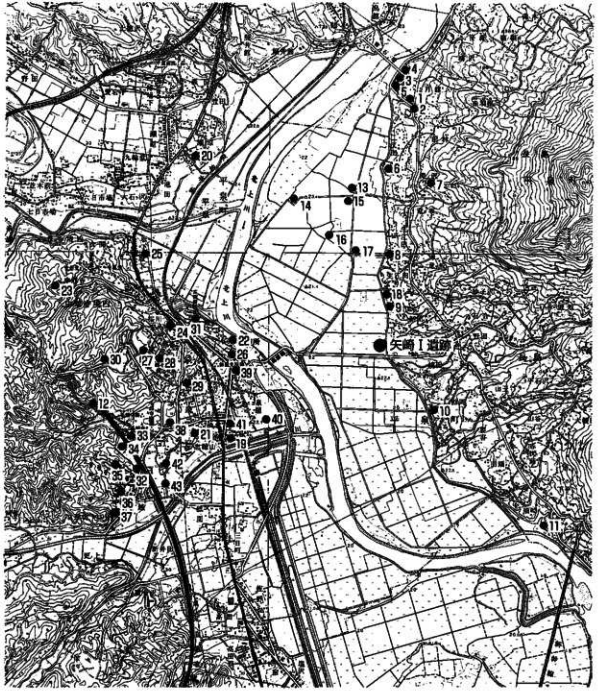


図6　周辺の遺跡

表1　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	種別	遺構・遺物	所在地
1	東福寺	縄文・平安	散布地・社寺跡	礎石・縄文土器	長島字月館
2	新山権現社	縄文	集落跡	住居跡・土坑・晩期の土器の捨て場	長島字月館
3	月館Ⅰ	縄文・中世	散布地	縄文土器・石器・須恵器	長島字月館
4	月館Ⅱ	中・近世	城館跡	主郭・堀・土塁	長島字月館
5	月館Ⅲ	縄文	散布地	縄文土器(中期)・石器	長島字月館
6	二反田	縄文	散布地	縄文土器	長島字二反田
7	滝ノ沢	縄文	散布地	縄文土器	長島字滝ノ沢
8	竜ヶ坂	縄文	散布地	縄文土器	長島字竜ヶ坂
9	新田	縄文	散布地	縄文土器	長島字新田
10	館岡	縄文	散布地	縄文土器(晩期)	長島字館岡
11	下平	縄文	散布地	縄文土器	長島字下平
12	大沢	縄文	散布地	縄文土器・石器	平泉字大沢
13	里	平安	散布地	かわらけ	長島字里
14	里前Ⅰ	平安	散布地	かわらけ・羽口	長島字里前
15	里前Ⅱ	平安	散布地	かわらけ	長島字里前
16	本町	平安	散布地	かわらけ	長島字本町
17	畑中	平安	散布地	土師器・かわらけ	長島字畑中
18	佐藤屋敷	平安	城館跡	池跡	長島字新田
19	泉屋	縄文・平安・中近世	散布地	縄文土器・かわらけ・陶磁器	平泉字泉屋
20	瀬原Ⅰ	平安	散布地	土師器・須恵器	平泉字瀬原
21	志羅山	平安・中近世	散布地	かわらけ・陶磁器	平泉字志羅山
22	柳之御所	平安	散布地・城館跡	かわらけ・陶磁器・堀・五郭	平泉字要害
23	中尊寺境内	縄文・平安	散布地・社寺跡	伽羅遺構・堀跡・かわらけ・陶磁器	平泉字衣関
24	衣関	平安	散布地・社寺跡	かわらけ・陶器	平泉字衣関
25	坂下	平安	散布地・社寺跡	伽羅遺構・堀跡・かわらけ・陶磁器	平泉字坂下
26	猫間ヶ淵	平安	散布地	池跡・かわらけ・陶磁器	平泉字猫間ヶ淵
27	金鶏山	平安	経塚	陶磁器	平泉字花立
28	花立Ⅰ		社寺跡・城館跡	礎石・瓦・かわらけ・陶磁器	平泉字花立
29	花立Ⅱ	平安	社寺跡・窯	建物跡・瓦・かわらけ・陶磁器	平泉字花立
30	鈴懸の森	平安	経塚	石和	平泉字大沢
31	高館	縄文・平安	散布地・城館跡	土塁・堀・段・平場・主郭・副郭・かわらけ	平泉字柳之御所
32	毛越寺Ⅰ	平安	散布地	建物跡・かわらけ・陶磁器	平泉字大沢
33	毛越寺Ⅱ	平安	散布地		平泉字大沢
34	毛越寺Ⅲ	平安	散布地		平泉字大沢
35	毛越寺Ⅳ	平安	散布地	かわらけ	平泉字大沢
36	毛越寺Ⅴ	平安	散布地・城館跡	かわらけ	平泉字大沢
37	毛越寺Ⅵ	平安	散布地	かわらけ	平泉字大沢
38	観自在王院	平安	社寺跡	伽羅遺構・かわらけ・陶磁器	平泉字大沢
39	無量光院	平安・近世	社寺跡	伽羅遺構・かわらけ・陶磁器	平泉字花立
40	伽羅之御所	平安	城館跡	土塁・かわらけ・陶磁器・堀	平泉字伽羅楽
41	倉町	平安	散布地	かわらけ・陶磁器	平泉字倉町
42	国衙館	平安・中世	城館跡	かわらけ・陶磁器・土塁・主郭・副郭	平泉字倉町
43	高衡館	平安	散布地	かわらけ・陶磁器	平泉字倉町

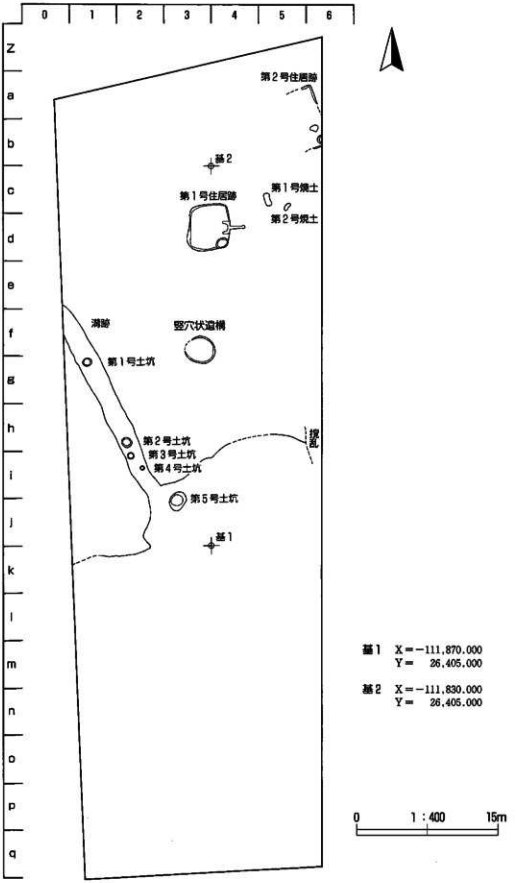

0
1
2
3
4
5
6
Z
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l
m
n
o
p
q
第2号住居跡
基2
第1号住居跡
第1号焼土
第2号焼土
溝跡
竪穴状遺構
第1号土坑
第2号土坑
第3号土坑
第4号土坑
撹乱
第5号土坑
基1
基1 X＝－111,870.000
Y＝ 26,405.000
基2 X＝－111,830.000
Y＝ 26,405.000
0
1：400
15m

図7 遺構配置図

Ⅲ．野外調査と室内整理の方法

1．野外調査

（1）調査区の設定

調査区中央部に基準点２点を設置し、それを基にグリッドを区画した。基準点１・２の成果値は以下の通りである。

基準点１　X＝－111,870.000　Y＝26,405.000　H＝21.921m

基準点２　X＝－111,830.000　Y＝26,405.000　H＝23.218m

調査区内には上記の基準点の他、補点を５ヶ所に設置している。

グリッドは、起点を北西に置き５×５ｍを１区画とした。東西方向は１から６まで、南北方向はａからｑまでを与え、その組み合わせによってグリッド名とした。(３ｄ区・６ｂ区など）なお、基準点１は４ｋ区、基準点２は３ｃ区の各グリッドにあたる。

（2）粗掘・遺構検出

調査はまず雑物の除去後に、文化課が実施した試掘結果の確認のためトレンチのクリーニングを行った。その後、表土の厚さや遺構の有無、遺物の出土状況を確認する目的で、２ｍ幅のトレンチを調査区全体に６本設定した。その後、遺構検出面までの深さや層序を確認し、重機及び人力によって表土除去を行った。遺構の検出は、Ⅱ層上面（沖積層である褐色土)、Ⅲ層上面（にぶい黄褐色土)、及びⅣ層上面（黒褐色土）の三面に分けて行った。

（3）遺構名の付け方

検出された遺構は、住居跡に関してはその属するグリッド名を付して、３ｄ住居跡・６ｂ住居跡などのように呼称した。土坑等に関しては、遺構を種類別にし検出順にそれぞれ、ＲＤ０１・ＲＧ０１などのように区別して呼称した。なお、本報告書では、第１号住居跡・第２号土坑などと全て遺構名を付けかえている。

（4）精査・実測

住居跡は４分法で、土坑・焼土等は２分法で精査し、必要に応じて使い分けた。実測は簡易やり方及び光波を用いて行った。遺構の断・平面図は20分の１を基本とした。遺物の取り上げ方は、大きく埋土と床面の２つに分け、埋土の遺物は４分割したものをＱ１～Ｑ４の区画名にして取り上げた。床面の遺物は番号を付し平面図に図化した後に取り上げた。

（5）写真撮影

野外での写真撮影は、35㎜版２台（モノクローム・カラーリバーサル１台ずつ）と６×７㎝版モノクロームを使用した。また、メモ的にポラロイドカメラも使用した。調査終了前には、セスナ機による空中写真撮影を行った。

2．室内整理

（1）遺物の処理

遺物は、野外調査と並行して雨天時などに水洗まで行い、その後室内で注記・接合・復元の順に進めた。土器類は報告書掲載用のものを選別後、登録作業・実測・拓本・写真撮影・トレースを行い、遺物図版を作成した。石器類は器種毎に登録し、土器類と同様に進めた。

（2）遺構図面

野外調査で得られた図面類は、標高等の確認・平断面図の点検をし必要に応じて合成した。その後トレース・遺構図版作成の順に進めた。

（3）図版について

遺物の図版はⅤ章にまとめて作成・掲載した。縮尺は、土器実測図が３分の１（土師器・須恵器・縄文土器）、拓影図は３分の１、石器類及び土製品は２分の１である。須恵器の拓影図は、左側に表面、右側に裏面のものを貼付している。土師器の実測図の表現は図８に示した通りである。

遺構図版は、遺構の種類毎に掲載した。縮尺は以下の通りである。

竪穴住居跡・竪穴状遺構・土坑……１／50、溝跡の平面図……１／125、断面図１／50

遺構の図版に使用したスクリーントーンについては、図８に凡例として示した。

（4）遺物写真図版について

遺物の写真図版の縮尺は、剝片石器原寸、礫石器２分の１、土器の立体が２分の１（坏類）、３分の１（甕類）、土器破片２分の１、土製品原寸、石製品類は３分の１を原則とした。なお、一部この縮尺に合わないものがある。

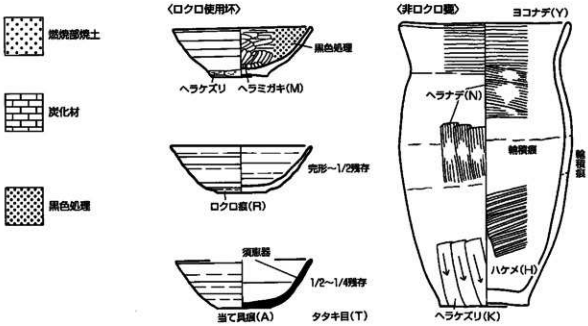


図８　実測図凡例

Ⅳ．検出された遺構と遺構内出土遺物

1．竪穴住居跡

本遺跡では、竪穴住居跡が２棟検出された。いずれも平安時代の遺構である。時期は１棟は９世紀前半から中頃の年代が与えられる。もう１棟は残存状況はよくなく良好な資料を得ることはできなかった。

第１号竪穴住居跡（３ｄ住）

遺構（図９・10、写真図版３）

（位置）調査区北側中央部に位置し、第２号住居跡と北東方向に９ｍの距離を置く。

（埋土）黒色土、黒褐色土主体。上部は耕作時に削平されており、下部のみ残存している。また、地山との境界が明瞭ではない。

（平面形）隅丸長方形（規模）4.75ｍ×4.35ｍ

（壁）緩く外傾して立ち上がっている。壁高は５㎝～16㎝である。

（床面）Ⅱ層のシルト質土を床面とする。床面中央部は固く締まる。

（柱穴）ＰＰ１～ＰＰ８の８基検出された。ＰＰ１・ＰＰ２・ＰＰ３（またはＰＰ４）が主柱穴と思われる。柱穴間の距離はＰＰ１とＰＰ２が3.3ｍ、ＰＰ２とＰＰ３が2.53ｍ（ＰＰ２・ＰＰ４間は3.37ｍ）である。ＰＰ８は遺構に伴うものであるかどうかは不明である。

（土坑）カマド右脇に貯蔵穴が１基検出された。規模・平面形は126㎝×119㎝のほぼ円形を呈し、深さは最大で34㎝を測る。

（カマド）＜位置＞東壁ほぼ中央＜主軸方向＞Ｎ－86°－Ｅ

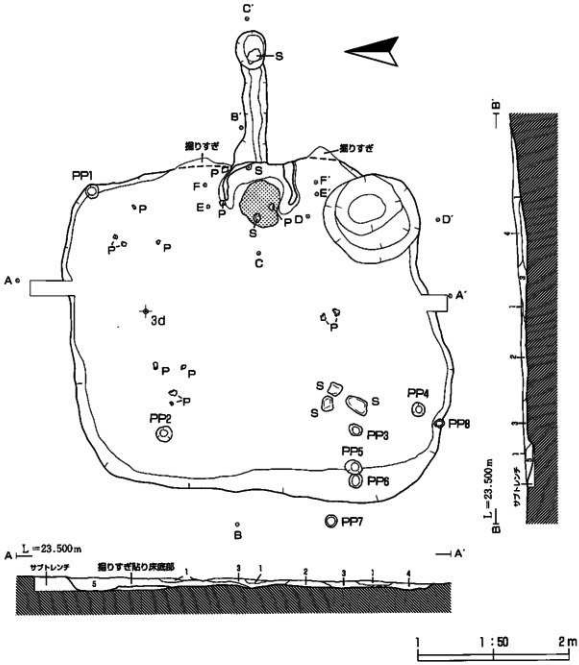
＜本体＞残存状況は比較的良好で、袖部、燃焼部焼土、支脚と思われる礫が残存している。袖部は粘土質土を芯材としていたと思われる。支脚と思われる礫の粒径は10㎝前後である。燃焼部焼土は、61㎝×51㎝の楕円形で厚さは最大で11㎝を測る。焼成は良好である。

＜煙道部・煙出部＞上部が削平されているため、煙道の形態（刳り抜き式か掘り込み式か）は不明である。煙道は一旦約10°の角度で緩やかに立ち上がった後水平になり煙出部に至る。煙道部の畑土は、燃焼部焼土周辺には焼土粒や炭化物が、煙道部中央部にはくすんだ焼土粒が入る。煙出部の平面形は50㎝×38㎝の楕円形で煙道部の底面から約20㎝掘り込まれている。

遺物（図16～18、写真図版８・９）

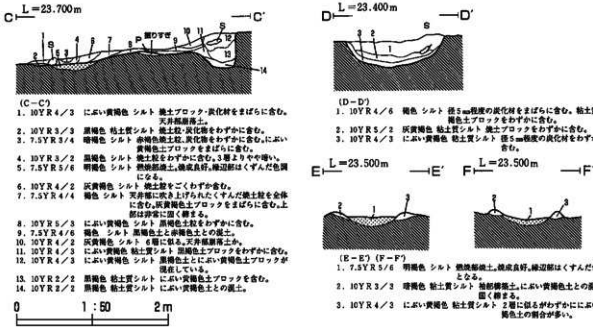
１～７は内面黒色処理された酸化炎焼成の坏である。いずれもロクロ成形で、内面調整は摩滅のため明瞭でないものが数点あるが、そのほとんどにヘラミガキが施されている。底部切り離し技法は、いずれも回転糸切りで、その後、６には胴部下端から底部にかけて、７には底部に再調整が施されている。８は、内面黒色処理されないいわゆる赤焼き土器である。器面調整はロクロ痕のみで、底部切り離し技法は回転糸切りである。９～13は酸化炎焼成の甕である。いずれも非ロクロ成形で９・13にはわずかにヘラナデ調整痕が見られる。11の器面調整は内外面ともにヘラケズリであり、12は外面のみにヘラケズリが施されている。14～18は還元炎焼成の坏である。19は手づくね土器としたが、ヘラナデ等の器面調整は施されている。20は土錘で、長さ3.3㎝、重さは約9.9ｇである。本遺構からの出土はこれ１点のみである。21は刀子で現存長は9.9㎝で、カマド脇土坑の畑土下部から出土している。22・23は磨石としたが、磨面はわずかである。

時期　出土遺物から９世紀前半から半ばに存在していた可能性が高い。



第1号竪穴住居跡（3d住）
（A－A'・B－B'）
1．10YR3／3　暗褐色　シルト　耕作土。
2．10YR2／2　黒褐色　シルト　黄褐色土ブロック、炭化物をまばらに含む。焼土粒を微量含む。
3．10YR5／4　にぶい黄褐色　シルト　黒褐色土ブロック、炭化物をまばらに含む。焼土粒を微量含む。
4．10YR5／6　黄褐色　シルト　褐色土との混土。炭化物、焼土粒微量含む。
5．10YR4／3　にぶい黄褐色　シルト　炭化物微量含む。

図9　第1号竪穴住居跡（1）



(C－C')
1. 10YR4／3 にぶい黄褐色 シルト 焼土ブロック・炭化材をまばらに含む。天井部崩落土。
2. 10YR3／3 黒褐色 粘土質シルト 焼土粒・炭化物をわずかに含む。
3. 7.5YR3/4 暗褐色 シルト 赤褐色焼土粒、炭化物をわずかに含む。にぶい黄褐色ブロックをまばらに含む。
4. 10YR3／2 黒褐色 シルト 焼土粒をわずかに含む。3層よりやや暗い。
5. 7.5YR5/6 明褐色 シルト 焼塊部焼土。焼成良好。縁辺部はくずれた色調になる。
6. 10YR4／2 灰黄褐色 シルト 焼土粒をごくわずか含む。
7. 7.5YR4/4 褐色 シルト 天井部に吹き上げられたくずれ焼土粒を全体に含む。灰黄褐色ブロックをまばらに含む。上部は淤積に固く締まる。
8. 10YR5／3 にぶい黄褐色 シルト 黒褐色土粒をわずかに含む。
9. 7.5YR4/6 褐色 シルト 黒褐色土と赤褐色土との混土。
10. 10YR4／2 灰黄褐色 シルト 6層に似る。天井部崩落土か。
11. 10YR4／3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 黒褐色土をわずかに含む。
12. 10YR4／3 にぶい黄褐色 シルト 黒褐色土とにぶい黄褐色土ブロックが混在している。
13. 10YR2／2 黒褐色 粘土質シルト にぶい黄褐色土ブロックを含む。
14. 10YR3／2 黒褐色 粘土質シルト にぶい黄褐色土との混土。

(D－D')
1. 10YR4／6 褐色 シルト 径5mm程度の炭化材をまばらに含む。粘土質黄褐色ブロックをわずかに含む。
2. 10YR5／2 灰黄褐色 粘土質シルト 焼土ブロックをわずかに含む。
3. 10YR4／3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 径5mm程度の炭化材をわずかに含む。

(E－E') (F－F')
1. 7.5YR5/6 明褐色 シルト 焼塊部焼土。焼成良好。縁辺部はくずれた色調となる。
2. 10YR3／3 暗褐色 粘土質シルト 地部構築土。にぶい黄褐色土との混土。固く締まる。
3. 10YR4／3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 2層に似るがわずかににぶい黄褐色土の割合が多い。

図10 第1号竪穴住居跡 (2)

第2号竪穴住居跡（6b住）

遺構（図11）

（位置）調査区内の北東隅に位置し、第1号住居跡と南西方向に9mの距離を置く。

（埋土）耕作時に埋土のほとんどが削平されており、貼り床の一部のみ残存している。

（平面形）不明（規模）不明だが6m前後か？

（壁）残存していない。

（床面）Ⅳ層上の粘土層を床面とする。

（柱穴）検出されなかった。

（土坑）燃焼部焼土右脇に貯蔵穴が1基検出された。一部調査区外に延びている。規模は88cm前後、平面形はほぼ円形であると思われる。深さは最大で14cmを測る。

（カマド）<位置>東壁南東隅寄りか？<主軸方向>不明

<本体>燃焼部焼土のみ残存。規模は93cm×57cmの不整円形で、厚さは最大で7cmを測る。焼成は良好である。

<煙道部・煙出部>調査区外に延びているため、詳細は不明である。

遺物（図19、写真図版10）

出土した遺物は酸化炎焼成の非ロクロ成形の甕（掲載番号24）1点のみである。

時期 出土した遺物から平安時代の遺構である可能性が高い。

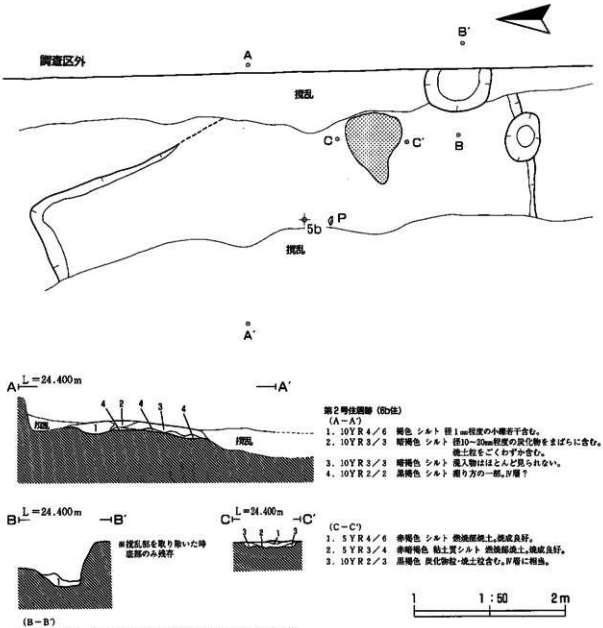


図11　第2号竪穴住居跡

2．竪穴状遺構

標準的な住居跡ほどの規模を持つが、炉を持たないものを竪穴状遺構として報告する。

遺構（図12、写真図版4）

（位置）調査区内の中央やや北寄りに位置し、第1号住居跡と北に9ｍの距離を置く。

（埋土）粘性の強い暗褐色土、黒褐色土主体。下部に入るに従って炭化材が多く混入する。全体としてはレンズ状の自然堆積の様相を示す。地山との境界が明瞭ではない。

（平面形）楕円形（規模）3.05ｍ×2.75ｍ

（壁）外傾して立ち上がっている。壁高は9㎝～24㎝である。

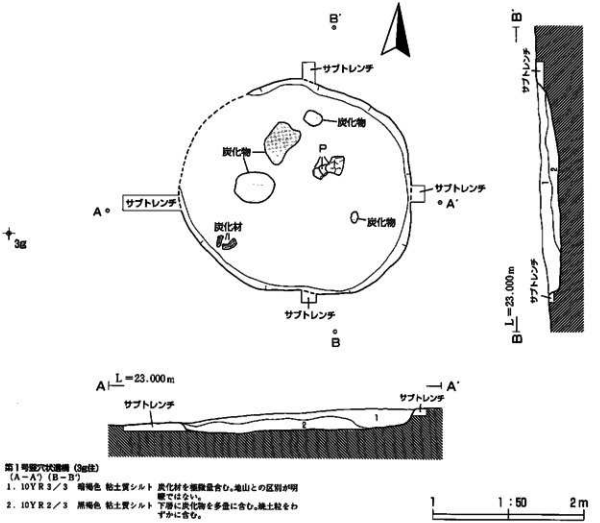
（床面）Ⅳ層下の粘土質土を床面とする。全体に固く締まる。

（柱穴）検出されなかった。

遺物（図19、写真図版10）

出土遺物は縄文の粗製土器の深鉢（掲載番号25）1点のみである。外面にはＬＲ単節の地文のみ、内面は比較的丁寧なナデが施されている。

時期　出土遺物から縄文時代後～晩期の遺構であると思われる。



第1号竪穴状遺構（3g住）
（A－A'）（B－B'）
1．10ＹＲ3／3　暗褐色　粘土質シルト　炭化材を微量含む。地山との区別が明瞭ではない。
2．10ＹＲ2／3　黒褐色　粘土質シルト　下部に炭化物を多量に含む。地土粒をわずかに含む。

図12　竪穴状遺構

3．土坑

調査区西側から5基検出された。うち4基は後述する溝跡の埋土を底面としている。出土遺物はなく詳細は不明である。

第1号土坑

遺構（図13、写真図版5）

（位置）1g区、竪穴状遺構の10m西に位置する。また、溝跡埋土上部を本遺溝が切っている。

（埋土）上部は黒褐色土、下部は暗褐色土を主体としている。全体としてはレンズ状に堆積している。いずれの層も炭化材を含む。

（平面形）円形（規模）87cm×86cm（深さ）16cm

（壁）外傾して立ち上がる。（底面）溝跡の埋土を底面としている。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

第2号土坑

遺構（図13、写真図版5）

（位置）2h区に位置する。第1号土坑とは北西方向に10mの距離を置く。また、本遺構も第1号土坑同様溝跡埋土上位を切っている。

（埋土）炭化材を含む暗褐色土主体。上部は削平されている可能性が高い。

（平面形）ほぼ円形（規模）107cm×98cm（深さ）7cm

（壁）外傾して立ち上がっている。（底面）溝跡の埋土を底面としている。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

第3号土坑

遺構（図13、写真図版5）

（位置）2i区に位置する。第2号土坑とは北北西方向に1m、第3号土坑とは南東方向に2m距離を置く。本遺構も、第1号・第2号土坑同様溝跡埋土上位を切っている。

（埋土）暗褐色土・炭化材を含む褐色土主体。上部は削平されている可能性が高い。

（平面形）円形（規模）65cm×64cm（深さ）5cm

（壁）緩く外傾して立ち上がっている。（底面）溝跡の埋土を底面としている。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

第4号土坑

遺構（図13、写真図版5）

（位置）2i区に位置する。第3号土坑とは北西方向に2mの距離を置く。本遺構も前述した土坑同様溝跡

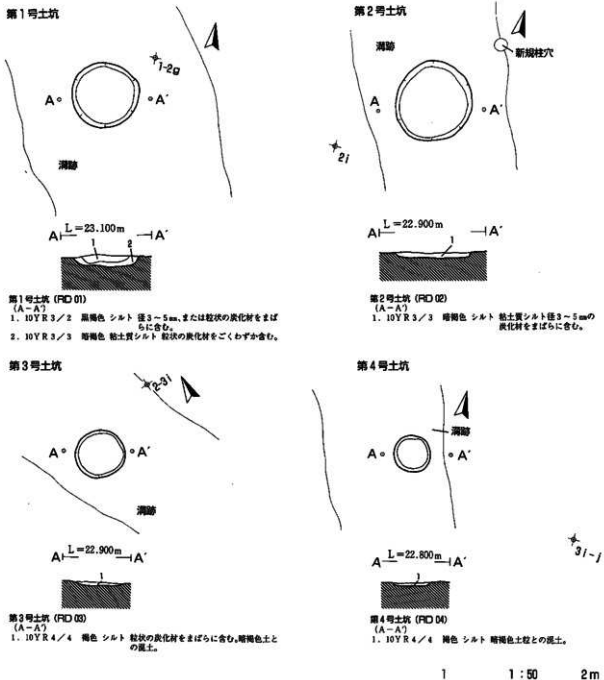


図13　土　坑（1）（第1号～第4号）

の埋土上位を切っている。

（埋土）暗褐色土を含む褐色土主体。

（平面形）円形（規模）49cm×48cm（深さ）4cm

（壁）外傾して立ち上がっている。（底面）溝跡の埋土を底面としている。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

第５号土坑

遺構（図14、写真図版６）

（位置）３ｊ区に位置する。第４号土坑とは北西方向に６ｍの距離を置く。

（埋土）円礫を含む黒褐色土主体。

（平面形）楕円形（規模）202cm×164cm

（深さ）26cm（壁）外傾して立ち上がる。

（底面）Ｖ層上の粘土質土を底面とする。

遺物　出土しなかった。

時期　不明である。

４．焼土遺構

調査区北東部、第１号住居跡の東から２基検出された。平面形は不整形で、上部から土師器片が出土している。竪穴住居跡の一部の可能性があるが残存状況が不良であることから焼土遺構として報告する。

第１号焼土

遺構（図14、写真図版６）

（位置）第１号竪穴住居跡の東北東約６ｍに位置し、第２号焼土と1.5ｍの距離を置く。（検出面）Ⅱ層上

（焼成）褐色土を呈する。焼成やや良。

（平面形）不整形（規模）68cm×26cm

（厚さ）最大で８cmを測る。

遺物　酸化炎焼成の坏の細片が出土している。

時期　平安時代の遺構であると思われる。

第２号焼土

遺構（図14、写真図版６）

（位置）第１号竪穴住居跡の東北東約４ｍに位置し、第１号焼土と1.5ｍの距離を置く。

（検出面）Ⅱ層上（焼成）橙色を呈し焼成良好な部分と、暗褐色土が入りくすんだ色調を為す焼成やや良好な部分がある。

（平面形）不整楕円形（規模）136cm×53cm

（厚さ）最大で10cmを測る。

遺物　酸化炎焼成の坏の細片が出土している。

時期　平安時代の遺構であると思われる。

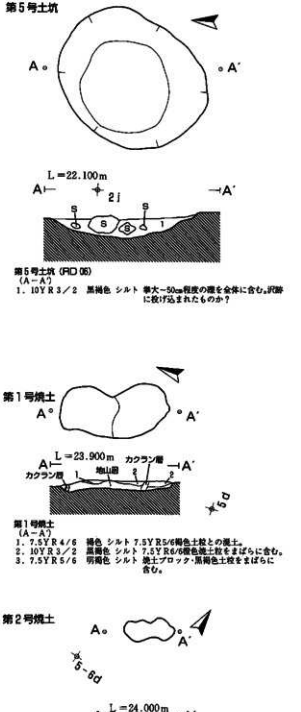


図14　土坑（2）（第５号）焼土遺構

5．溝跡

遺構（図15、写真図版７）

（位置）１ｆ区～１ｇ区～２ｈ区～２ｉ区の４グリッドにまたがって位置する。また、第１号～第４号土坑に埋土上位を切られている。なお、北西端は調査区外に延びている。

（軸方向）Ｎ－31°－Ｗ

（埋土）５層に細分される。１層は炭化材を微量含み地山との境界を示している。２層は埋土上位に十和田ａ降下火山灰を含む。なお、分析・鑑定の結果、この火山灰は降下時に本遺構の埋土となっている可能性が高いことが判明している。３層～４層は下位に入る従って埋土内の砂粒の含有量が増加する。５層は固く締まった粘土質土。底面から遺物が出土している。

（規模・形態・方向）規模は上端幅130cm～252cm、下端幅42cm～48cm、深さ74cm～107cmで、全長は約20mである。なお、断面形は逆台形を呈している。方向は北西―南東でありほぼ直線的である。北西端はさらに調査区外に延びていると思われる。南東端は沢跡と思われる区域に入り、切れる。

遺物（図19～21、写真図版10～12）

26～32は内面黒色処理された酸化炎焼成の坏である。摩滅のため明瞭ではないものが数点あるが、内面調整はヘラミガキが施されている。底部切り離し技法は全て回転糸切りで、28～32にはその後胴部下端に再調整が施されている。33は内面黒色処理されない酸化炎焼成の坏、いわゆる赤焼き土器である。底部のみ残存しており、切り離し技法は回転糸切りである。34は内面黒色処理された、35は内面黒色処理されない高台付坏である。いずれも底部切り離し技法は回転糸切りである。36・37は鉢とした。36は内面黒色処理され口縁部から胴部にかけて丁寧にヘラミガキが施されている。37はロクロ成形の後外面にヘラケズリ調整が施されている。38～43は酸化炎焼成の甕である。38は内面にはヘラナデ、外面にはヘラケズリ調整が施されている。40は底部に木葉痕が見られる。41～43は胴～底部の破片でいずれも外面にヘラケズリ調整が施されている。44は還元炎焼成の甕の胴部破片である。内面には当て具痕が外面にはタタキメが施されている。45～48は埋土上位から出土した土錘である。49は土鈴である。土玉の入る部分の約1/2が欠損している。50は掻・削器で縁辺部にわずかに２次加工の痕が見られる。

時期　出土遺物から９世紀前半～半ばの遺構であると思われる。

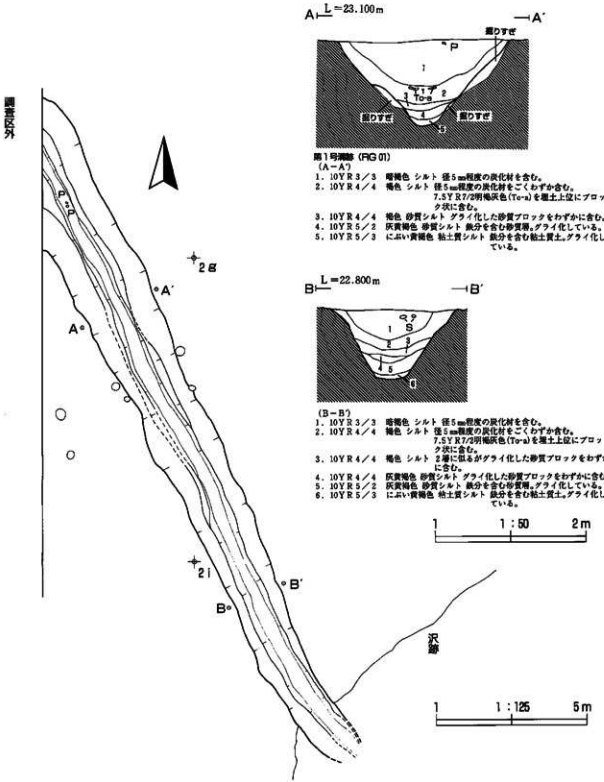

調査区外
A
L=23.100m
A'
黒ひすぎ
P
1
2
3
To-a
4
5
黒ひすぎ
黒ひすぎ
第1号溝跡 (RG 01)
(A－A')
1. 10YR 3／3 暗褐色 シルト 径5mm程度の炭化材を含む。
2. 10YR 4／4 褐色 シルト 径5mm程度の炭化材をごくわずかに含む。
7.5YR 7/2明褐灰色(To-a)を褐土上位にブロック状に含む。
3. 10YR 4／4 褐色 砂質シルト グライ化した砂質ブロックをわずかに含む。
4. 10YR 5／2 灰黄褐色 砂質シルト 鉄分を含む砂質層。グライ化している。
5. 10YR 5／3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 鉄分を含む粘土質土。グライ化している。
B
L=22.800m
B'
1
S
2
3
4
5
(B－B')
1. 10YR 3／3 暗褐色 シルト 径5mm程度の炭化材を含む。
2. 10YR 4／4 褐色 シルト 径5mm程度の炭化材をごくわずかに含む。
7.5YR 7/2明褐灰色(To-a)を褐土上位にブロック状に含む。
3. 10YR 4／4 褐色 シルト 2層に似るがグライ化した砂質ブロックをわずかに含む。
4. 10YR 4／4 灰黄褐色 砂質シルト グライ化した砂質ブロックをわずかに含む。
5. 10YR 5／2 灰黄褐色 砂質シルト 鉄分を含む砂質層。グライ化している。
6. 10YR 5／3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 鉄分を含む粘土質土。グライ化している。
1
1：50
2m
1
1：125
5m
P
2a
A'
A
2i
B'
B
沢跡

図15 溝 跡

Ⅴ．遺構外土遺物

遺構外からの出土遺物は、縄文時代晩期に属する土器片が数点と土師器・須恵器片が合わせて中のコンテナ１箱、土製品２点、石器１点、陶磁器片１点である。土器類は縄文土器２点、土師器５点を掲載した。

１．土器類（図21・22、写真図版13）

（１）土師器

51は内面黒色処理された酸化炎焼成の坏である。第１号竪穴住居跡上の表土からの出土である。内面調整法は摩滅のため不明である。底部切り離し技法は回転糸切り後ヘラの再調整が施されている。52～54は内面黒色処理された酸化炎焼成の高台付坏である。52には内面にヘラミガキが施されている。54にも摩滅のため明瞭ではないがヘラミガキが施されていると思われる。55は内面黒色処理されない高台付坏である。52～55の高台付坏の底部切り離し技法はいずれも回転糸切りで、その後高台部を付ける際にヘラにより再調整が施されている。

（２）土製品

56・57は第１号住居跡上の３ｄ区表土から出土した土錘である。長さは3.6㎝～3.9㎝である。57は本遺跡から出土した他の土錘と異なり、中央部が膨らんだ形状をしている。

（３）縄文土器

58はミニチュア土器としたが、器形等詳細は不明である。59は高坏の底部である。内面は丁寧に磨かれている。縄文晩期末から弥生初頭に比定されると思われる。60は深鉢の胴部破片である。外面には地文のみ施されている。

２．剥片石器（図22、写真図版13）

61は摘み部と刃部を併せ持つ石器、石匙である。摘み部は右上隅に付く型のものである。本遺跡からは１点のみの出土である。

３．陶磁器（図22、写真図版13）

62は沢跡から出土した青磁碗の破片である。連弁文をもち、13世紀後半から14世紀に比定される遺物と思われる。

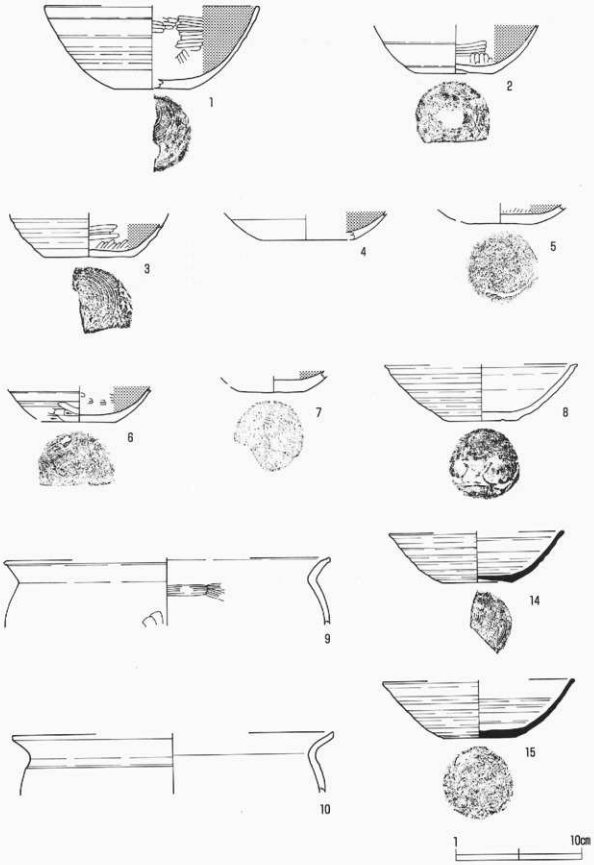


図16　遺構内出土遺物（1）

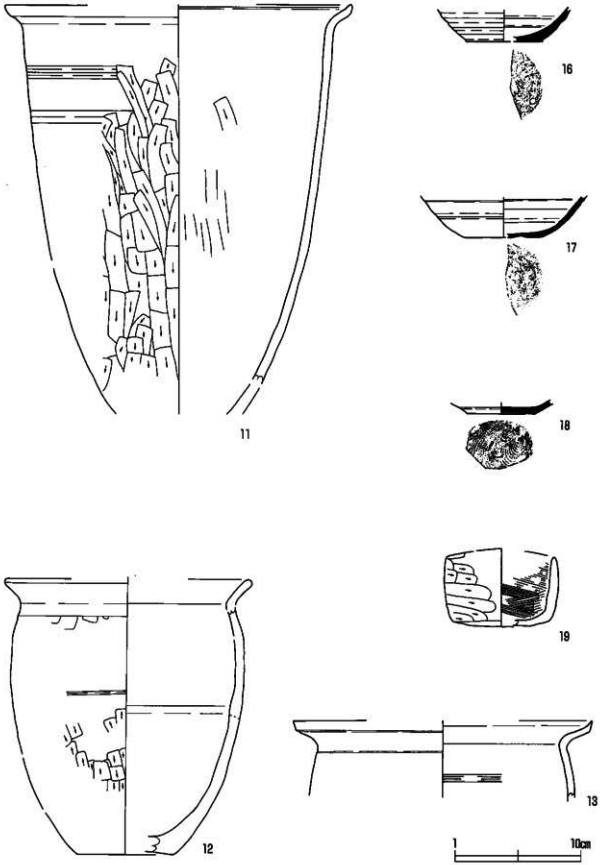
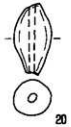
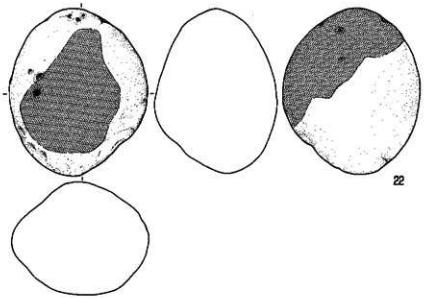


図17　遺構内出土遺物（2）





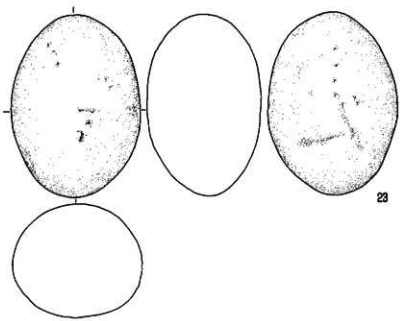
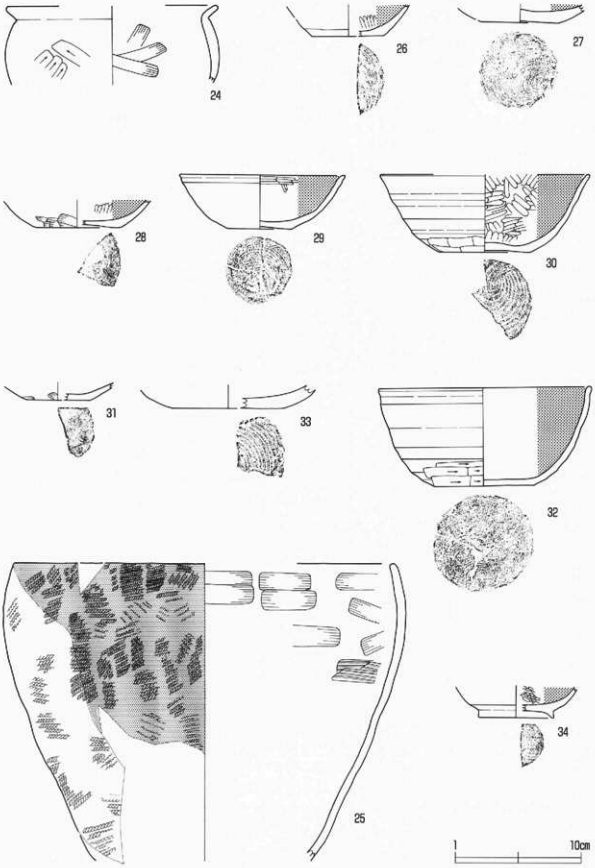


図18　遺構内出土遺物（3）



25：網かけ部分は煤付着

図19　遺構内出土遺物（4）

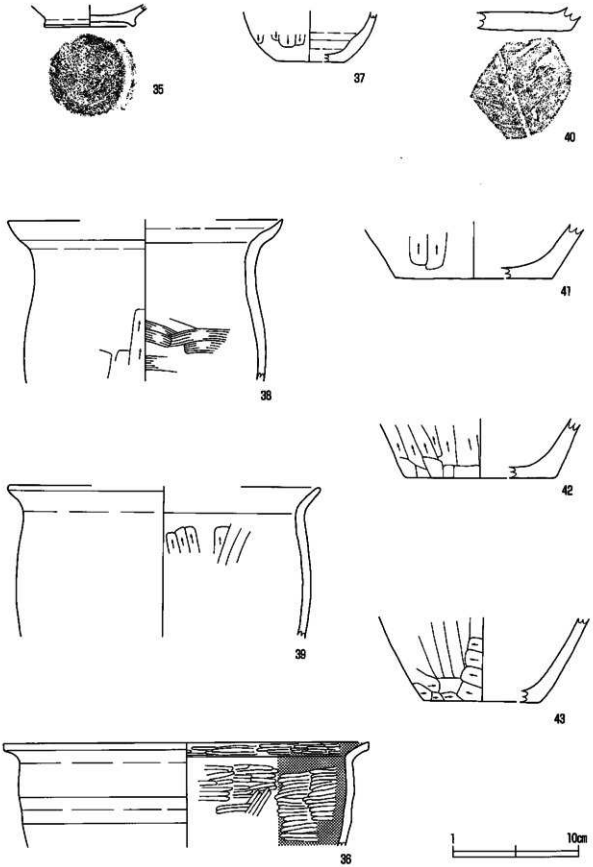


図20　遺構内出土遺物（5）

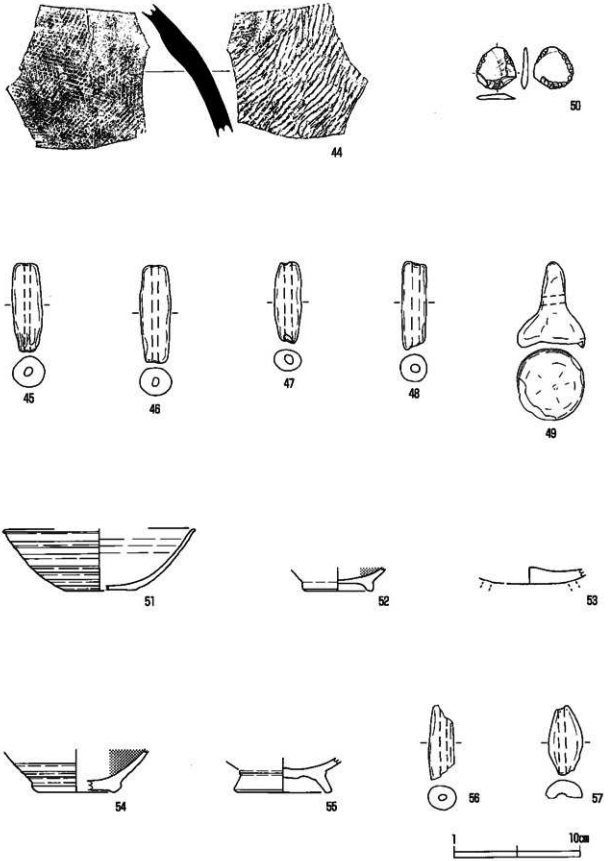


図21　遺構内出土遺物（6）・遺構外出土遺物（1）

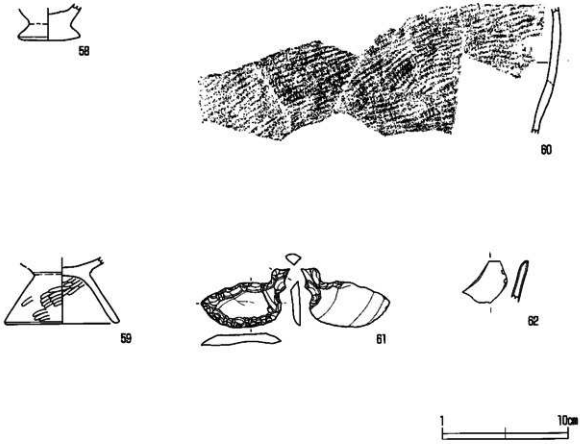


図22　遺構外出土遺物（2）

表2　土器観察表1

〔 〕：推定値　〈 〉：推存値

番号	出土地点・層位	種類	器種	部位	外面調整(口縁部/底部)	内面調整(口縁部/底部)	外面調整(胴部/底部)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底厚(cm)	備考	図版	写真
1	第1号住居跡カマド脇土師皇上	土師器	坏 |口～底部	M	M	R	R/回転糸切り	(17.1)	(6.0)	6.5	0.7	内黒	16	8
2	第1号住居跡埋土(ベルト内)	土師器	坏	胴～底部	—	M	—	R/回転糸切り	—	(8.0)	(3.7)	0.5	内黒	16	8
3	第1号住居跡埋土(ベルト内)	土師器	坏	胴～底部	—	M	—	R/回転糸切り	—	(7.0)	(3.2)	0.5	内黒	16	8
4	第1号住居跡埋土(ベルト内)	土師器	坏	胴～底部	—	M?	—	R/回転糸切り？	—	(5.8)	(1.9)	0.6	内黒。摩滅のため調整見えず。	16	8
5	第1号住居跡床面	土師器	坏	胴～底部	—	M	—	R/回転糸切り	—	(5.1)	(1.2)	0.7	内黒。底部ヒずみに回転糸切り痕有	16	8
6	第1号住居跡床面直上	土師器	坏	胴～底部	—	M	—	R/回転糸切り・最底下端・底部へラの再調整	—	(8.0)	(2.5)	0.6	内黒	16	8
7	第1号住居跡床面直上	土師器	坏	底部	—	—	—	／回転糸切り後底部へラの再調整	—	(5.4)	—	1.1	内黒	16	8
8	第1号住居跡床面直上	土師器	坏	口～底部	R	R	R	R/回転糸切り	(15.2)	5.5	4.4	0.5	非内黒	16	9
9	第1号住居跡床面直上	土師器	甕	口～胴部	Y	N	Y		(25.8)	—	(5.1)	—	非内黒	16	9
10	第1号住居跡焼土層上	土師器	甕	口～胴部	Y		Y		(23.4)	—	(4.6)	—	非内黒	16	9
11	第1号住居跡埋土(Q2)	土師器	甕	口～胴部	R	K	R	K	(27.5)	—	(29.2)	—		17	9
12	第1号住居跡カマド脇土師皇上	土師器	甕	口～底部	R	R	R	K	(18.4)	(5.4)	21.8	1.5		17	8
13	第1号住居跡カマド内	土師器	甕	口～胴部	R	R	R	R	(23.1)	—	(5.5)	—	非内黒	17	9
14	第1号住居跡埋土(Q4)	須恵器	坏	口～底部	R	R	R	R/回転糸切り	(13.8)	(5.4)	4.1	0.4		16	9
15	第1号住居跡焼土層上	須恵器	坏	口～底部	R	R	R	R/回転糸切り	(15.4)	5.8	4.6	0.6	胎土小礫含む。	16	9
16	第1号住居跡埋土(ベルト内)	須恵器	坏	胴～底部	—	R	—	R/回転糸切り	—	(8.0)	(2.5)	0.5		17	9
17	第1号住居跡床面直上	須恵器	坏	胴～底部	R	R	R	R/回転ヘラ切り	—	(5.8)	(2.3)	0.4		17	9
18	第1号住居跡床面直上	須恵器	坏	底部	—	—	—	／回転糸切り	—	(5.4)	—	0.5		17	9
19	第1号住居跡埋土	土師器	手づくね	口～底部	N	H	K	K	(8.4)	(7.4)	6.1	0.8		17	9
24	第2号住居跡壁ウ方埋土	土師器	鉢	口～胴部					(16.8)	—	(5.8)	—		19	10
25	第1号溝D状遺構	縄文土器	深鉢	口～胴部										19	10
26	第1号溝跡埋土上位	土師器	坏	胴～底部	—	M	R	R/回転糸切り	—	(5.6)	(2.3)	(0.5)	内黒	19	10
27	第1号溝跡埋土上位	土師器	坏	底部	—	—	—	／回転糸切り	—	5.9	—	0.9	内黒。底部内面に刺突痕有	19	10
28	第1号溝跡埋土上位	土師器	坏	胴～底部	—	M	—	R/回転糸切り・最底下端へラの再調整	—	(6.6)	(1.8)	0.4	内黒	19	10
29	第1号溝跡埋土上位	土師器	坏	口～底部	M	M?	R	R/回転糸切り・最底下端へラの再調整	13.1	5.1	13.1	0.5	内黒	19	10
30	第1号溝跡埋土下位	土師器	坏	口～底部	M	M	R	R/回転糸切り・最底下端へラの再調整	(16.1)	(7.0)	(5.9)	(0.5)	内黒	19	10
31	第1号溝跡埋土上位	土師器	坏	底部	—	—	—	R/回転糸切り・最底下端・底部へラの再調整	—	(5.0)	—	0.4	内黒	19	10
32	第1号溝跡埋土上位	土師器	坏	口～底部	M?	M?	R	R/回転糸切り・最底下端へラの再調整	16.4	7.7	7.5	0.5	内黒。一部内黒とび	19	10
33	第1号溝跡埋土上位	土師器	坏	底部	—	—	—	R/回転糸切り	—	—	—	0.9	非内黒	19	10
34	第1号溝跡埋土下位	土師器	高台付坏	胴～底部	—	M	—	R/回転糸切り	—	(6.1)	(2.2)	0.5	内黒	19	10
35	第1号溝跡埋土上位	土師器	高台付坏	胴～底部	—	R	—	R/回転糸切り	—	(7.1)	(1.3)	0.5	非内黒	20	10
36	第1号溝跡埋土上位	土師器	鉢	口～胴部	M	M	R	R	(28.2)	—	(7.6)	—	内黒	20	11
37	第1号溝跡直面直上	土師器	鉢	胴～底部	—	R	—	R→K	—	(5.4)	(3.4)	0.6		20	11
38	第1号溝跡埋土下位	土師器	甕	口～胴部	R	N	R	K	(21.1)	—	(10.7)	—		20	11
39	第1号溝跡底面上	土師器	甕	口～胴部	R	K	R	R	(24.2)	—	(10.8)	—		20	11
40	第1号溝跡埋土上位	土師器	甕	底部	—	—	—	／木葉痕	—	(9.4)	—	1.5		20	11
41	第1号溝跡埋土下位	土師器	甕	胴～底部	—		—	K	—	(12.0)	(3.3)	0.9		20	11
42	第1号溝跡埋土上位	土師器	甕	胴～底部	—		—	K	—	(10.8)	(3.7)	0.9		20	11
43	第1号溝跡埋土上位	土師器	甕	胴～底部	—		—	K	—	(9.0)	(6.1)	0.9		20	11
44	第1号溝跡埋土下位	須恵器	大甕	胴部	—	A	—	T	—	—	—	—		21	12
51	3c区表土(1層)	土師器	坏	口～底部			R	R/回転糸切り後ヘラの再調整	(15.2)	(5.6)	(5.9)	0.3	内黒。摩滅のため調整見えず。	21	13
52	4区Ⅱ層下	土師器	高台付坏	胴～底部	—	M	—	R/回転糸切り後ヘラの再調整	—	(5.2)	—	0.4	内黒	21	13
53	5c区Ⅱ層下	土師器	高台付坏	底部	—	—	—	R/回転糸切り後ヘラの再調整	—	(5.9)	—	1.1	内黒	21	13
54	4d区Ⅱ層上	土師器	高台付坏	胴～底部	—	M?	—	R/回転糸切り後ヘラの再調整	—	(5.8)	—	0.8	内黒	21	13
55	4d区Ⅱ層下	土師器	高台付坏	底部	—	—	—	R/回転糸切り後ヘラの再調整	—	7.4	(2.3)	0.5	非内黒	21	13

表3　土器観察表2

番号	出土地点・層位	種類	器種	部位	原体	文様の特徴	内面	備考	図版	写真
25	第1号竪穴状遺構	縄文土器	深鉢	口～胴部	LR			後・晩期	19	10
58	4gG区Ⅱ層上	縄文土器	ミニチュア土器?	底部			内面雑な作り		22	13
59	3gG区Ⅱ層上	縄文土器	高坏	底部			ミガキ	縄文晩期末～弥生初頭	22	13
60	3gG区Ⅱ層上	縄文土器	深鉢	胴部	LR	地文のみ		後・晩期	22	13

表4　鉄・土製品観察表

番号	出土地点・層位	種類	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版	写真
20	第1号住居跡床面直上	土製品	土錘	3.3	2.1	0.7～0.8	9.9		18	9
21	第1号住居跡カマド脇土坑埋土	鉄製品	刀子	9.9	1.6	0.6	15.09		18	9
45	第1号溝跡埋土上位	土製品	土錘	4.7	1.6	0.6	12.2		21	12
46	第1号溝跡埋土上位	土製品	土錘	5.1	1.7	0.5～0.6	12.9		21	12
47	第1号溝跡埋土上位	土製品	土錘	4.3	1.6	0.3～0.7	7.8		21	12
48	第1号溝跡埋土上位	土製品	土錘	4.6	1.4	0.4～0.6	9.2		21	12
49	第1号溝跡埋土中位	土製品	土錘	4.6	3.5	1.2	19.6		21	12
56	3cG区Ⅱ層上	土製品	土錘	(3.9)	1.4	0.5	7.7		21	13
57	3cG区表土(1層)	土製品	土錘	3.6	1.9	0.5～0.8	5.2	一部欠損	21	13

表5　石器観察表

番号	出土地点・層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図版	写真
22	第1号住居跡カマド内	磨石	8.5	6.9	6.1	476.0	アプライト	18	9
23	第1号住居跡床面直上	磨石	9.6	6.8	6.1	511.2	安山岩	18	9
50	第1号溝跡埋土	砥・削器	2.1	2.1	0.3	1.3	頁岩	21	12
61	4区Ⅱ層下	石匙	4.7	3.1	0.6	8.1	頁岩	22	13

表6　陶磁器観察表

番号	出土地点	器種	胎土	釉調・絵付	産地	年代	備考	図版	写真
62	3gG区Ⅱ層下	青磁碗	灰色	線彫文	中国・元	13世紀後半～14世紀		22	13

Ⅵ. ま と め

1．遺構

本遺跡から検出された遺構は、竪穴住居跡２棟、竪穴状遺構１棟、土坑５基、焼土遺構２基、溝跡１条である。

竪穴住居跡は調査区北側から２棟検出された。うち１棟はそのほとんどが削平されてしまっており東壁の１部を確認するに留まった。また、出土遺物も少なく詳細な時期を特定できなかった。もう１棟の竪穴住居跡は、出土遺物から９世紀前半～半ばにかけて存在していたと思われる。

竪穴状遺構は調査区のほぼ中央から検出された。縄文時代の遺構は本遺構のみである。出土遺物からは縄文時代後～晩期に属すると思われる。なお、周辺からは晩期末～弥生初頭に比定される高坏が出土している。

土坑は５基検出された。うち４基は溝跡の埋土を底面としている。平面形はいずれもほぼ円形である。出土遺物はなく詳細な時期は不明である。

焼土遺構は２基検出された。上部から土師器片が出土している。住居内のカマドの可能性はあるが残存状況が不良であることから焼土遺構として報告している。

溝跡は１条検出された。開口部径や深さ及び位置から、区画溝の可能性がある。隣接する平成13年度調査区の調査結果と合わせて、本遺構の性格を明らかにしたい。

2．遺物

大コンテナ２箱分の土器、土製品、鉄製品、石器、陶磁器片が出土している。土器のうちの９割が平安時代の土師器で、残りが須恵器と縄文土器である。土師器の器種は、主に坏・甕である。坏は黒色処理されたものの占める割合が多い。甕はロクロ痕のみを有する甕はなく、すべて何らかの調整が施されている。土製品は土錘が６点、土鈴が１点、また、第１号竪穴住居跡から鉄製品（刀子）が出土している。石器は礫石器２点、剥片石器２点出土している。

引用・参考文献

金 子 昭 彦ほか　1993：「新山権現社遺跡発掘調査報告書」　岩文振報告書第188集　㈶岩文振

国 生　　尚ほか　1985：「高玉遺跡発掘調査報告書」　岩文振報告書第93集　㈶岩文振

酒 井 宗 孝ほか　1996：「小幅遺跡第４次発掘調査報告書」　岩文振報告書第265集　㈶岩文振

高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正　1982：「岩手の土器」　岩手県立博物館

八 木 光 則　　1996：『岩手の９世紀初頭の土器』「日本土器辞典」　雄山閣出版

付篇　　矢崎Ⅰ遺跡のテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、この火山灰層が火山噴火物（テフラ）に由来するものかどうかを確認し、テフラであれば指標テフラとの対比を行う。（テフラ分析）今回は火山ガラスの屈折率を測定し、この結果と既存データとの比較を行うことにより、より確実にテフラの由来を特定することとする。また、同試料の重鉱物組成と、火山ガラスの混入率（火山ガラス比）を明らかにすることにより、試料内のテフラ由来物質の混入の度合いを考える材料とする。

1．試料

分析を行う試料は、溝跡のA—A′断面において、2層上部にブロック状に認められた火山灰サンプル1点である。この火山灰層は、2層上部で下に凸の形状で断続的に帯状に認められている。

2．分析方法

（1）テフラ分析

試料適量を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に持つ塊状及び気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

（2）屈折率測定

テフラ分析用に洗い出された試料から細粒な砂分を採取し、この中に含まれる火山ガラスの屈折率を測定する。屈折率測定には、温度変化型屈折率測定装置“ＭＡＩＯＴ”（古澤，1995）を用いて、火山ガラス30片程度を目標として計測する。

（3）重鉱物組成

試料約10ｇに水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径1/4mm—1/8mmの砂分を、ポリスタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

（4）火山ガラス比

重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、テフラ分析と同様に、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の３つの型に分類する。

3．結果

（1）テフラ分析

試料には火山ガラスと軽石が含まれ、スコリアは認められない。火山ガラスは中量含まれ、無色透明の軽石型が最も多く、次いで無色透明のバブル型が多く認められる。軽石型の火山ガラスでは、繊維束状のもの

が多く認められる。軽石は多量に含まれており、透明がかった白色を呈し発泡がやや良好－やや不良であるものが認められる。

（2）屈折率測定

屈折率測定結果を図1に示す。測定された火山ガラスの屈折率は、1.5033—1.5083である。屈折率が1.506付近にピークが認められ、広い範囲にやや拡散して認められる。

（3）重鉱物組成

重鉱物は、斜方輝石・単斜輝石・不透明鉱物の3鉱物を主とする組成である。これらの重鉱物には、鉱物粒の周囲に火山ガラスが付着しているのも多く認められる。そのほか、わずかに角閃石も認められる。

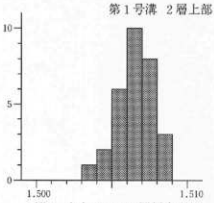


図1 火山ガラスの屈折率
横軸は屈折率、縦軸は測定個数を表す。

（4）火山ガラス比

無色透明の軽石型火山ガラスが多量に含まれ、次いで無色透明のバブル型火山ガラスが多い。わずかに無色透明の中間型火山ガラスも含まれている。「その他」とした粒子には、光を透過しない白色の軽石が多く含まれている。以上の（3）及び（4）の結果を、図2・表1に示す。

表1 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料名	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	ジルコン	緑レン石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
第1号溝2層上部	150	40	5	1	1	46	7	250	10	2	140	98	250

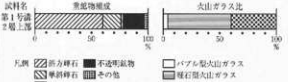


図2 重鉱物組成および火山ガラス比

4．テフラの対比

今回認められた軽石と火山ガラスは、その形態と火山ガラスの屈折率、遺跡の地理的位置、重鉱物組成、町田ほか（1981）および町田・新井（1992）等の記載から、To−aに由来すると考えられる。To−aはA.D915年に十和田カルデラより噴出したとされ、給源から南方の東北地方一帯に広く分布している。（町田・新井,1992）。同文献には、斑晶鉱物として斜方輝石と単斜輝石が挙げられている。To−aに含まれる火山ガラスの屈折率は町田ほか（1981）では1.499−1.508、町田・新井（1992）では1.496−1.504と記載されている。溝跡2層上部に含まれる砂分では、軽石および火山ガラス以外の粒子が非常に少ない。火山ガラスの占める比率は約60％と高く、「その他」とした粒子には軽石が多く含まれている。また、重鉱物は、周囲に火山ガラスが付着している斜方輝石・単斜方輝石が多く認められることから、To−aに由来する重鉱物が多く含まれていると考えられる。To−aの斑晶鉱物ではない角閃石の含有量は、きわめて少ない。これらのことから、溝跡2層上部の火山灰層はTo−aが降下堆積したものがそのまま保存されたものである可能性が高く、To−aが噴出したA.D915年に堆積したと考えられる。したがって、To−aが噴出したA.D915年に、溝跡の埋積が進んでおり、地表面では窪地状を呈していたと考えられる。

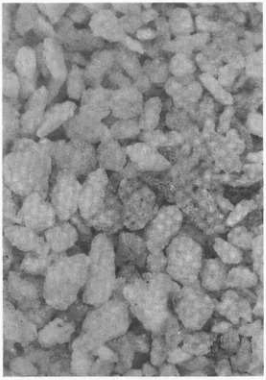
引用文献

古澤　明（1995）「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」地質学雑誌101、P123−133

町田　洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」P276、東京大学出版会

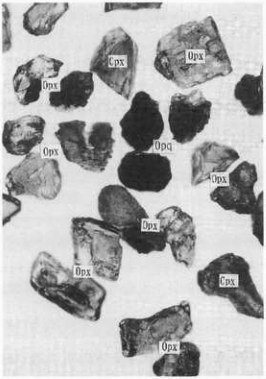
町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）「日本海を渡ってきたテフラ」科学51、P562−569

図版1　テフラ・重鉱物



1．To-aの軽石（第1号溝跡埋土中位）

2．To-aの火山ガラス（第1号溝跡埋土中位）



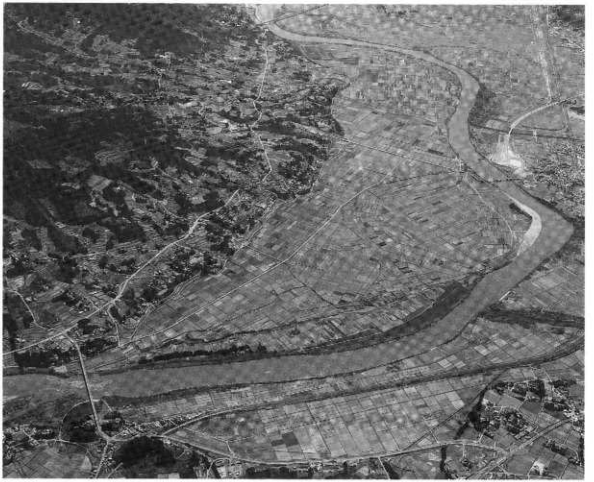
3．重鉱物（第1号溝跡埋土中位）

1mm
(1)

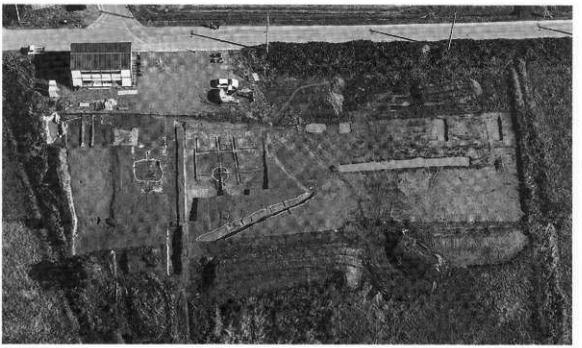
0.5mm
(2, 3)

Opx：斜方輝石、Cpx：単斜輝石、Opq：不透明鉱物。

写　真　図　版

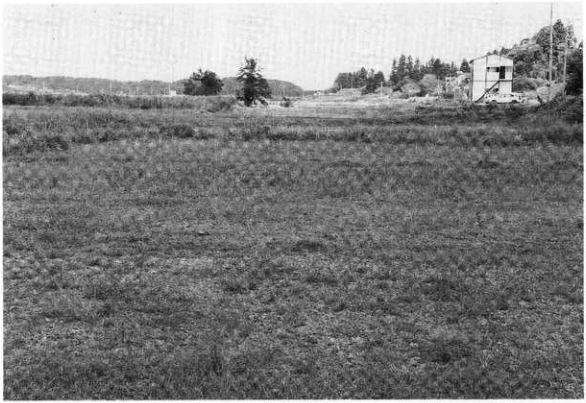


遺跡遠景（北から）

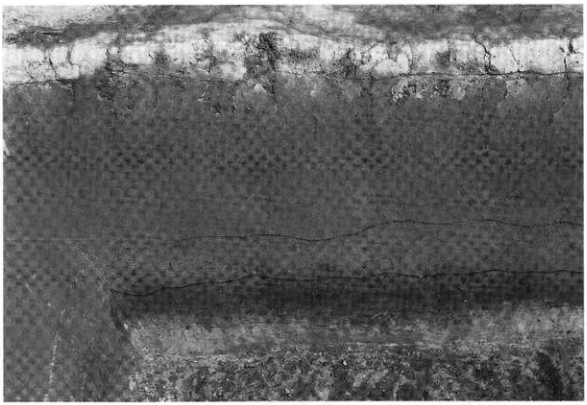


調査区全景（西から）

写真図版１　空中写真

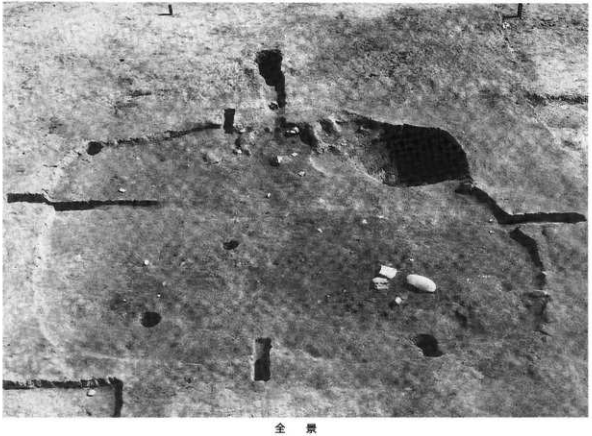


調査前風景

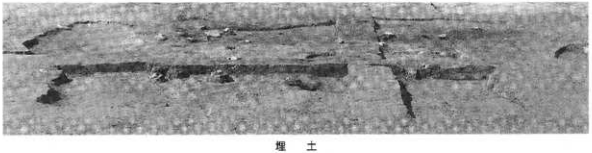


基本土層

写真図版2　基本土層

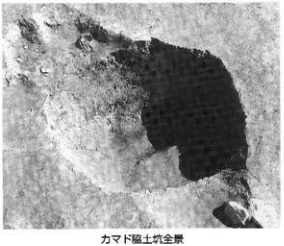


全　景



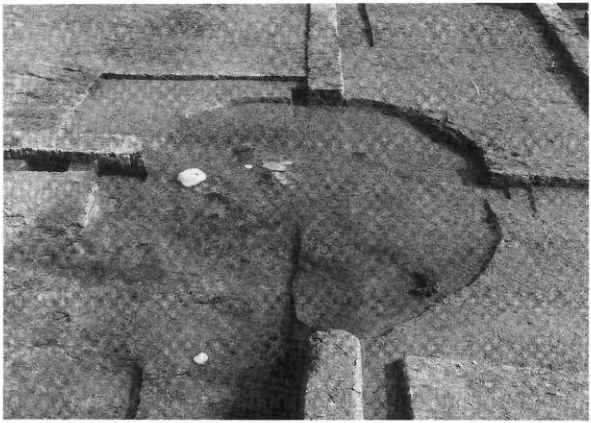
埋　土

カマド全景

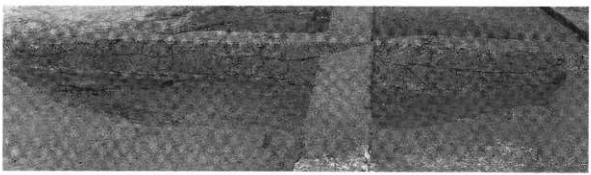


カマド脇土坑全景

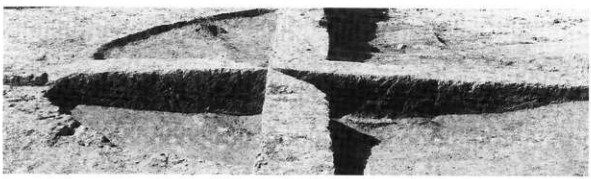
写真図版3　第1号竪穴住居跡



全　景

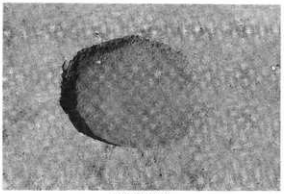


埋　土

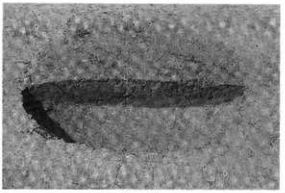


埋　土

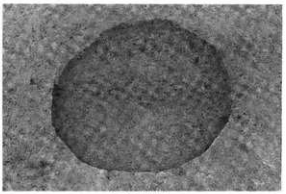
写真図版 4　竪穴状遺構



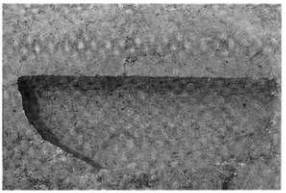
第1号土坑



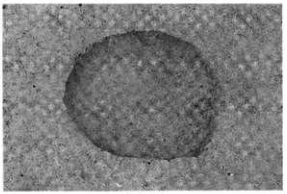
埋　土



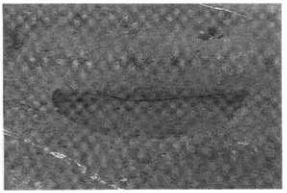
第2号土坑



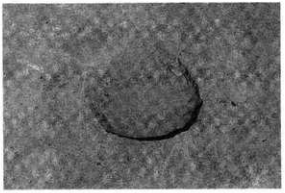
埋　土



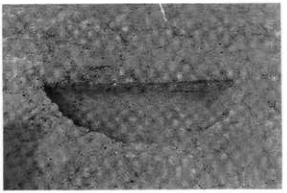
第3号土坑



埋　土



第4号土坑

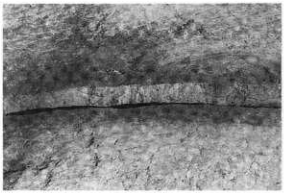


埋　土

写真図版5　土　坑（1）

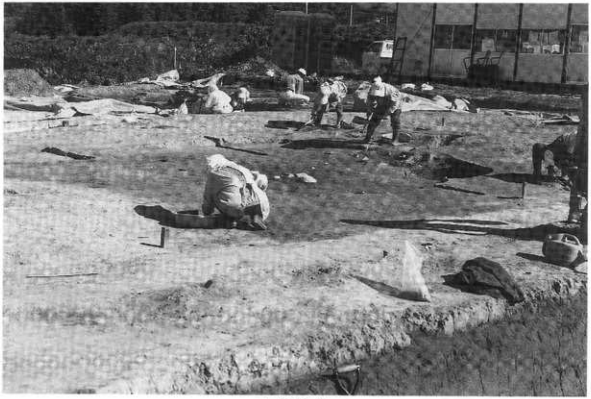
第5号土坑

埋　土



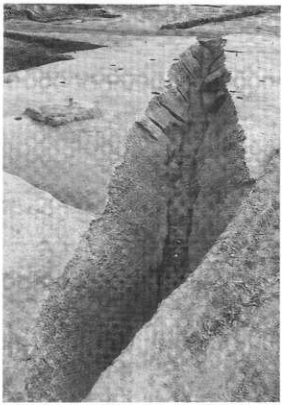
第1号焼土断ち割り

第2号焼土断ち割り

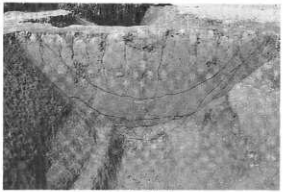


調 査 風 景

写真図版6　土　坑（2）・焼土遺構



全　景（北から）



埋　土（北側）

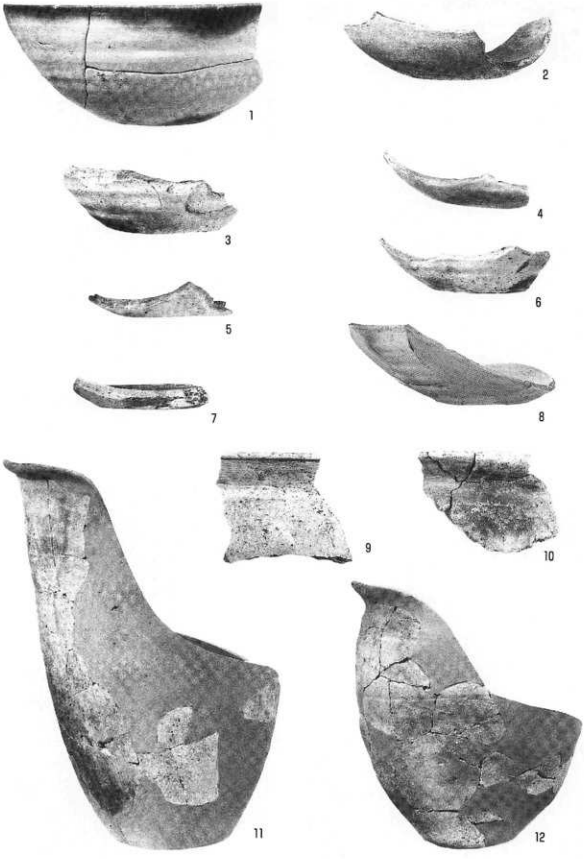
土器出土状況

全　景（南から）

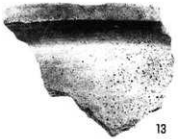
埋　土（南側）

調査風景

写真図版7　溝　跡



写真図版８　遺構内出土遺物（1）


13

14

16

15

17

18

19

22

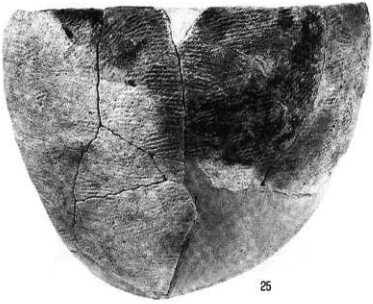
21

20

23

写真図版９　遺構内出土遺物（2）

24


25

26

27

29

28

31

30

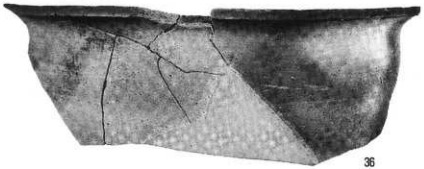
33

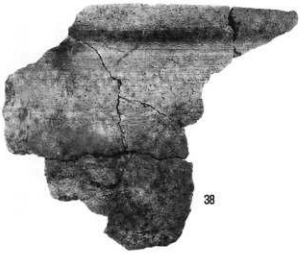
34

32

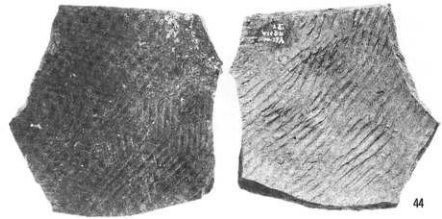
35

写真図版10　遺構内出土遺物（3）

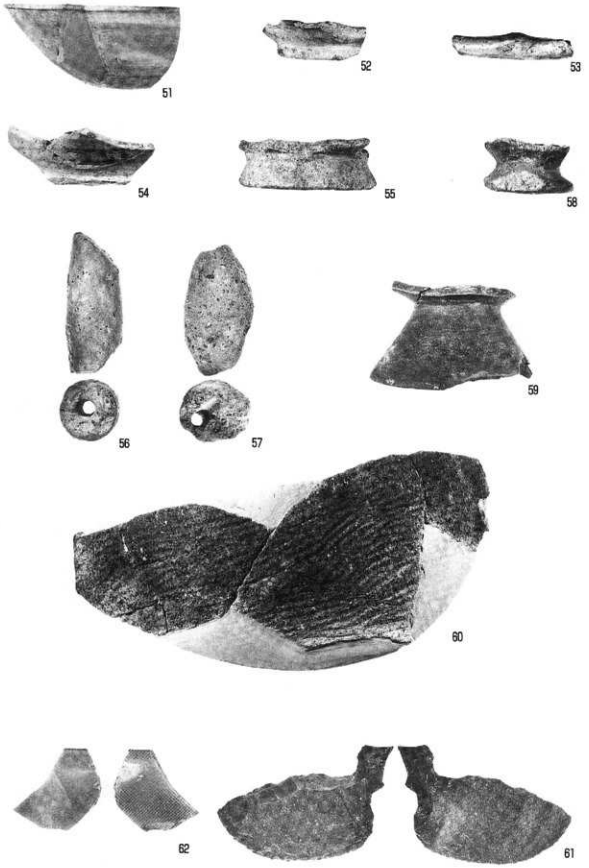




写真図版11　遺構内出土遺物（4）



写真図版12　遺構内出土遺物（5）



写真図版13　遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	やざきいちいせきだいいちじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	矢崎Ⅰ遺跡第1次発掘調査報告書
副書名	一関遊水地内河川工事
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第372集
編著者名	早川　悟、中川重紀
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185　TEL 019-638-9001
発行年月日	西暦2001年10月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
矢崎Ⅰ遺跡 (やざきいちいせき)	岩手県西磐井郡平泉町長島字矢崎126-1ほか (いわてけんにしいわいぐんひらいずみちょうながしまあざやざき)	03402	NE76-0283	38度 59分 30秒	141度 08分 17秒	20000901 ～ 20001110	2,150	一関遊水地内河川工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢崎Ⅰ遺跡 第1次	集落跡	平安時代 縄文時代	竪穴住居跡　2棟 竪穴状遺構　1棟 溝跡　1条 土坑　5基	土師器・須恵器・土錘7点・刀子1点 縄文土器	

平成13年度（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

【職　員】

所長	伊藤民也	副所長	高橋正儀

〔管理課〕

課長	蓮沢正吾	嘱託	高橋照雄
課長補佐	山崎音光	〃	佐々木光重
〃	山岸直美	〃	加藤美代子
主査	立花多加志	〃	湯沢邦子

〔調査第一課〕

課長	佐々木勝
課長補佐	佐々木清文
〃	高橋義介
文化財専門員	小山内透
文化財調査員	中田迪
〃	飯森秀文
〃	赤石登
〃	吉田充
〃	亀大二郎
〃	小原眞一
〃	佐々木信一
〃	小笠原健一郎
〃	金野進
〃	小松則也
〃	岩渕計
〃	鳥居達人
〃	金子昭彦
〃	羽柴直人
〃	千葉正彦
〃	長村克稔
〃	星幸文
〃	佐藤あき子
〃	菊池貫広
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	村木敬
〃	北村忠昭
〃	高瀬克範
〃	丸山浩治
〃	島原弘征
〃	中村絵美
期限付調査員	小林弘卓
〃	江藤教
〃	菊池賢
〃	井川信介
〃	又香
〃	吉田真由美
〃	坂部恵造
〃	木村ひかり

〔調査第二課〕

課長	高橋典右衛門
課長補佐	中川重紀
文化財専門員	金子佐知子
文化財調査員	阿部眞澄
〃	飯坂一重
〃	阿部徹
〃	濱田宏
〃	安藤由紀夫
〃	高木晃
〃	佐藤淳一
〃	星雅之
〃	菅原靖男
〃	半澤武彦
〃	杉沢昭太郎
〃	瀧浩二郎
〃	中村直美
〃	西澤正晴
〃	八木勝枝
〃	(阿部勝則)
期限付調査員	吉川徹
〃	北田勲
〃	吉田里和
〃	原美津子
〃	齋藤麻紀子
〃	駒木野智寛

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第372集

矢崎Ⅰ遺跡第1次発掘調査報告書

一関遊水地内河川工事関連遺跡発掘調査

印 刷　平成13年10月23日
発 行　平成13年10月30日

発 行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185
電　話　(019)638-9001・9002
ＦＡＸ　(019)638-8563

印 刷　大場印刷工業株式会社
〒020-0062　盛岡市長田町14番31号
電　話　(019)623-3228

©㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001